ゼミ論文

『戦後日本における混血児の処遇について』

日本大学国際関係学部国際交流学科３年

佐藤　傑

章立て

第１章　エリザベス・サンダース・ホームについて
第２章　黒と白
第３章　変化していく混血児イメージ
第４章　結論

同論文は､戦後アメリカ占領下の日本に生まれた日米混血児がどのような運命をたどったかをたどり、日本人がもつ人種観、とくに白人へのあこがれ、白人を「美」として切望する態度は敗戦直後からあったわけではない、ということを考察する。

今でこそ「ハーフ」には肯定的なイメージがあるが、戦後は「混血児」とよばれ育児放棄される場合が多く、そのため混血児孤児を専門に引き受けるエリザベス・サンダース・ホームが沢田美喜氏によって設立された。「あいのこ」「占領の落し物」として社会差別を受けていた混血児にどのような教育をほどこすかという問題が立ちはだかった。上流階級出身の沢田氏の方針で混血児を「冷たい社会の目」から守るため、彼らは隔離教育を受けた。その結果子供達は、社会的孤立、精神的萎縮、生活経験の欠如といった問題をかかえながら育つことになる。　日本社会もまた､彼らのことをよく学ばぬまま、時は経過していく。「混血児はものを盗む」「野蛮である」といった無責任なイメージが映画や雑誌記事などを通じて広まっていく。さらに白人系混血児と、黒人系混血児への世間の対応の違いは、サンダース・ホームの教育者をも悩ませた。

しかし 1960 年代にむかい、彼らに対する社会認識にある程度の改善が見られるようになり､1970 年代になると　混血児に対する世間の視線が急激に変化する。　団時朗、草刈正雄などの　ハーフのモデルが脚光をあびるようになってくるのだ。　特に彼らは資生堂男性化粧品のＣＭモデルをつとめた、ということが注目に値する。　つまり彼らは大衆にとっての「美」の見本となったのだ。　彼らのほかにも　山本リンダ、ゴール

デン・ハーフなどの女性歌手がお茶の間の人気者になっていく。　その頃には「混血児教育の成功例」として、神奈川県大和市の小学校で、混血児 31 人が日本人児童と共にプールに入って楽しい時間を過ごしたことが新聞で報道された。　これは日本人児童が彼らの肌の色を見て、その違いに気付き、それでも一緒に遊ぶことができた、ということで「成功例」らしい。

最後に、ライシャワー駐日アメリカ大使の 1964 年のエピソードを紹介したい。　彼は日本人少年に刺された際、虎ノ門病院に搬送され、日本人の血を輸血され命を取りとめた。その際、「私は（在日宣教師の息子として）日本に生まれたが、日本の血はなかった。だが輸血によって多くの日本人の血をいただいたので、混血児になったようだ」と述べた、という。　ライシャワー大使は、日米関係を改善する立場にあり、他のアメリカ人より政治・外交の視点から深く混血児問題に関わっていかなければならないはずだ。　しかし彼のこの「軽はずみ」な発言には、混血児が抱える根の深い問題への理解や、温かい眼差しが全く感じられない。　ライシャワー大使だけでなく、アメリカ社会も日本に置きざりにした日米混血児を軽視しているように思える。

終戦直後の日本社会は、混血児を日本の敗戦を想起させる存在とみて、嫌っていたようだ。　なので、戦前「白人」に対するあこがれはあったにもかかわらず、戦後社会では白人系の混血児は嫌がられたように思える。いずれにしても多くの日本人が混血児を差別し、彼らに健全で安全な教育の場を与えなかった。混血児達に対する社会の偏見・差別を教育の場において、私生活の場においてしっかり指導できなかった。　それで「差別」はいつのまにか「あこがれ」にすりかわり、「白人はかっこいい」といった無責任な態度に日本人の心理が流されていった一因でもあるように思える。　結局日本人は、「人種」「肌の色」という問題に真剣に向き合うことなく、その場限りの態度を取ってきているようだ。